823
.M8N2

岷江入楚

胡蝶

24

Freer Gallery of Art
Washington D.C.

胡蝶

卅六歳　太政大臣

三月廿日余御前船楽事　中宮御方女房乗舟也

其後春御前有御遊事

兵部卿宮歎青柳行事

西対姫君人々通情事

兵部卿家挿頭花給事

中宮季御読経事

蝶鳥舞童事

春御方供花事

紫上被春消息於中宮事

四月人々通艶書於西対姫君事

兵部卿宮　右大将　鬚黒大将也　中将君　柏木也

源氏君与玉鬘物語事

源氏君以玉鬘事語紫上給事

源氏君与玉鬘君戯給事

胡蝶　玉鬘並二　以胡蝶哥為巻名　秋好中宮与紫上之哥巻名とす

こてふにもさそはれなまし心ありて八重山吹をへたてさりせは

紫御返　紫上乃哥也　女乃君ふ在り

花そのの小蝶をさへや下草に秋まつむしはうとくみるらん

私胡蝶とかける胡蝶とつくる詞なり

中書　初音巻同年也　此年之紀元ハ三月　從三月乃夏を記せり

又　玉鬘並也

玉云　玉かつら並　玉鬘乃なりしありけり　此巻源氏卅六三月より夏まで

抄　いふらく　此巻同年

やよひ廿日あまりのころほひ

浮〇よりには

外乃さとにはまたふりぬにや

私　初音の翌年なれはなり　字曰

出　外の里にはいまたふりぬにや

余のふるさとをぬりやとうさうひ云へり外の里にはまたやあるへし

ここは打出でたる心也　春の花をとこの御前のありさまにはいはれてありたるへき

弄　あまりぬとしいひやうさおもしろく女房のなかに此本乃それとわかれ

ひなくおもしろく彩なるよりおもふへし

抄　ちやようそのいはゆる〇しまそへ弄　時ふるれとも此本乃三秋乃あ

つらなれとも今も永よいゆへに花色はうまさし花とも云ひつかてし置

三月廿日余りなれはさやまさるものあのつらなきありぬ色さ〳〵と此御

前よ程ありぬるかれの里もおひさもやとも云御おれかありぬ心をも云道

山の木たち中島のわたりあまりこさけの字をしるしおきて

抄　岩の浪あつ時ふふ行みてもゆくはんさうく人〳〵とよ出てふ色さ

とて来ると所して世々く此源氏かまはるかになりん

字　池乃はるかなと所て見えまかりしくゆり

ころからふんまれてあく

しくおりふしなりけり
からめいたる舟作らせ給　龍頭鷁首之支度之摸唐船也　鷁与鷀同
箋 一本にからめいたるとあり　もとの浦なからまし
不 船の装束之唐風のならひに摸也慢(?)也
此舟ともいそかせ給
おろしはしめさせ給　秘 舟の事也
うたつかさの人めして　河 雅楽寮人也
中宮このころ　秘 秋好也
彼是まかてさせ給へりし事海しのひし給へりし御事なりとも
乙女巻に秋好中宮の御方　みなもとは紫のにほひ御ことを見て
秋草と風のつくによそへられる(?)　或抄云 奥 花になし女中にてハ源氏の
宮の内にこの時こそ此宮ハ秋好宮ともよみて萬葉集に紀明年紀の頃なりし
一年若ハ秋遠之しかるに或にときく　或一本 奥 花に此事の加之
これに紛中とも申し　秘 此ほとや紫上の人々
秋好くも源氏のとも
かなふへくもなかりけり
なとかくもゐかくれてしかは給ひけるなりけん
奥 昔の中宮とハ同院のうち

同云紫院の中に今宮ハよしみとそ給ふに此宮へ被御心ハ昔
昔とし昔の中宮方こそかゝりに同し院の内まても心得へくそ
ありけり給ハぬなんと思ひまゐりて見なん事とおほえ
ありし女房達の物見のへく事にこそ　不 中宮を此院の里におハ
しますことうち紫に給ふこそ人とりの御に不及世にはかなき
に女房達を舟に乗せて南の池のこなたの院の池へこしはへりて
奥 中宮の女房達とて
本 中宮の女房を舟に乗せて紫の上の方とりんするこそ
南の池のこなたに遊(?)ふしるへし　秘 むつましき院の町と
見かつの比ありし院の池のほとりの宮より紀出なるなり
ちいさき山を隔てて比翼山　秘 中務のなとこなたよりかよひまて
隔てて見えし南の方たはむれに此院へ出る事とし
かはとの　箋 松貞世云いとやうに見えて日本の物の紀をこそ此物数(?)ならし
これにかよひ給ふ人　奥 紫上の方の人々
紫上の女房なとより同給よ乗ふくあそひて
龍頭鷁首を　前よりあひておりしと云も此事とてハ是となれ

あとんのよ海のひろきりのし鷁ハ風をえてよく能ハ施なれたとおなし

始めハ摂ぢ録ハ日もつくられ人のよく船の事をもし来り

龍ハ鷁首ハ女ともをとこともある事も同事なりや

弘和よりこの事一二度し是ハおかし始の日しハ此のかくと

也後のためハ中宮の御ためハ御しつらひよりはじめなりしと

箋
龍頭鷁首　鷁五歴切又作䳜又作艗

誘　註云鷁舌鳥也畫其象著船首以禦水患　淮南子龍舟鷁首浮吹以虚高

龍舟張鳳蓋　註云畫龍於舟也　文選云浮鷁舟　西都賦登

滑為益州刺史謀伐呉造戦舟艦鷁快戦於舣首　晋王

鷁鳥雄鳴上風鳴下風則孕艗江東人船前画青鷁因名　曜江神

かちとりのさほさすわらはべみなみづらゆひてもろこしめきたる

うちのさまかはりおもしろし

まことにしらぬ国に　来たらむ心ちして

みな池の中へこぎ出させ給ふほどなれハ御前の方ハみなうちとけて

くしくまかり

中島の入江の岩かげ　前よりさしよせて山のこだち中島の

よこうりミとりしあくおりふといふよふりてみやるし

色をましたる　柳関　柳無気力條先動　池有波文氷

盡開のうれしきなるへし

ほかにはさかりすぎたる桜も　矣

孟上ノ詞にほかの里にはさかりすぎぬるも中じけし此殿内にはさ

てはとかんぬる人の詞し廊の院をめぐるわたりにあるへくおもてし

御前の方はまことにはなやかなるといふなるへし

秘
花ゐる義　花をもおもしろし

らうをめぐれる藤の色も

央砌紅葉桐　攀枝摘櫻桃　白氏文集秦中吟　繞廊紫藤架　帶花移牡丹

おしてかえのけやまぶきいとさかりなり

河
柳無氣力條先動　池有波文氷盡開

後
水の面よりはやかにうつりまさる花や池の心ちゆりとこかれとくらん

水鳥のつがひをはなれずあそびつつほそきえだどもをくはへてとびちがふ　伊勢

をしの波のあやにもんをまじへたるなど物のゑやうにもかきとらまほしき

水面なりけり

りのゝ曇座りみなもりきらわ
海ちかくれおのゝえもくちひけ色う
いつしへ人ゝまんおらつまともきぬ
あらくらおとはこのふよにとのとはさおのえいこにきさうん
所々もりんしこらまゆにおのえれ行しやそらゆりゝう

此宗祇乃山はの紅葉也也なつかし
同 百首ハおのゝえくちけん山かつや
後久合

郡国志曰石室山一名石橋山一名空石晋中朝時有王質者嘗入山伐木至石室有童子数四弾琴而哥質同杖斧柯而聴之童子一物与質状如棗〻梅含之不復飢還後小停亦謂俄頃童子語曰汝來已久何速不去質應声而起柯已爛尽

筌此說おりし結し理のみ事めらしゝれるもし

私曰述異記云信安郡石室中晋樵者王質逢二童子圍碁与質一物如棗核食之不飢置斧於坐而観童子曰汝斧柯爛質帰郷閭无復時花　句斎

凡やもちくれ花さ人ゝなれらてこやなふよそてなら山ゝ見れさ花

矣 此句もハ中京れ御乃この人ゝ見れおとこれ人ゝれ哥

秘 矣よ同し作もふさしてみなとも

此 浪乃花おさらら咲て蓬来わりあれ花とハ風やなりらん

山の乃浦一説云をはやと成云此名不し定治山吹浪とかなれ不は

情拾日記云石山よ参りて海のらてゝいくのしのゝ花ふくゝゐるを

見やりてあれ中よわれみきゑけり

矣 山の乃浦名不し 定治も伝まもに家乃哥未見ゝ

来乃花やみうくれ浪よかかのしんまうれ山のそこともしまなり

升まゝ山の乃名不なれハ家とおなさくいちり

逢の乃山もしらの 舟の中にもとまね名をやらうにおきなすき

蓬莱山員鼇亀背也　白氏文集覔蓬莱不敢帰童女舟中老

秘 文集ノ句を川家まんも不老不死の藥ハ此宗祇へ何か覔蓬莱ハと

矣 私勘蓬莱㝡鼇亀背㝡列子ヨリ書タリ

列子第五湯問篇曰湯又問物有巨細乎有修短乎有異同乎

革草云渤海之東不知幾億万里有大壑焉實惟無之谷其下

無底名曰皈墟八紘九野之水天漢之流莫不注之而無増無

減焉其中有五山焉一曰岱輿二曰員嶠三曰方壺四曰瀛州

五曰蓬萊其山高下周施三万里其頂平処九千里山之中閒
相去七万里以為隣居焉其上臺觀皆金玉其上禽獸皆純縞
珠玕之樹皆叢生花實皆有滋味食之皆不老不死所居之皆
仙聖之種一日一夕飛相往來者不可數焉而五山之根無所
連著々常悟潮波上下往還不得暫時焉仙聖毒之訴之於帝
匕恐流於西極共郡聖之居乃命禺彊使巨鼇十五擧首而戴
之迭為三番六万歳一交焉五山始峙而不動云々
まれ目のうらにさしてり舟ハさかれさりくもうれそらりくは
眼あり糸氣うりらりしきあし
桜くうさもしうつらんさとも
桃源なとのとうし　安日
續齊諧記云漢明帝時永平十五年中剡縣有劉晨阮肇二人共入
天台山採藥共道路粮食之盡望山上有一桃樹二人共取食
之如覚少健下山得澗水飲之並各澡洗行一里又度一山溪
見二女顔容妙絶便喚劉阮姓名如有舊交歡悦因問郎等來
何晩也因邀過家廳亦無男兒又有女家云來慶女壻各出樂
器弄調劉阮就所邀女宿言語巧弄行丈婦之道住十五日求
還女曰今来至此皆宿福所招得与仙女交合流俗何可楽
半遂住半年天氣恒如二三月求云切女云罪根不滅便若木
此共劉阮還家無相識郷里怪三共乃驗七世子孫也
私云此云糸流れをさぬ人あるをはきとゝへさ而あられ
も喧仙宮乃こうしとかめくいつあし
秘　平調あ栄なわ
うう三ゆうしとりふかく
仏　皇麞　平調　拍子　各十　遊壱一帖序一帖拍子十　無舞壱序共
新——　破三帖拍子　各十　并八并九両帖合舞九帖打三
度拍子廿　可弾十一反
弄　南宮譜云昔善僚此曲者大臣源常朝臣物師安曇經
私云此楽平調を用る事時乃調子にかなハれ不審に似たれ
平調を根本とはいえて金ノ壱ゝ終乳平調ハ律呂相兼てゆうう
をせまりし次其中をえらりけあに祝云乃調子に用之云々
これハ哀も時ノ調子双調なりる人ニ〻歳光平調を用あ味あまし
又十二律に配する時平調を正月にとらし意ありろや
人よもあるれつりとのよさうしにせう秘て

守 おほさはらし日もつゆや蓋のうへにたゝみもあつれとし
あれたつるはやしこもれる　　秘 安名尊ハさせつる催馬楽とさゝる
御らされかくれ人〳〵　　堂上の人々これ　又あるまゝれとこれ
しれとこゝろえきませぬるかしこにおとしら次
河右 かんつさせて柳さくらとこゝろえませて称てまれかし右のわかる
堀上猶花と云給ふを錦のふもとうつくしう人々これ花とさく
こゝろえませしうんるなと上なりし人々さくし律絲よ用ハ別乃うるもとし
舞人（ニイウト）　　箋 秘めたる色とさ次
おまへ乃座　　秘 堂上ふも示とはうし
もみのしこも　　秘 拍乃師 舞人し
そうてうあきさあて　　河 双調
秘 まれこゝ人〳〵なれらし　　箋 私云双調ハ呂也 本音也 乙まれ
調なれし平調を陰く時の調子とのしそてあるし
うへよ御ちらしゆ御 まひとしも
堂上ふるゝ絃とをゝますうし ふかくもこハ絃ノ無名但蔵もてあり
あれあかとあそひあふ　　河 安名尊 催馬楽呂也
私云双調ノ示ハ呂なれし催馬楽呂を用ゐるなり

あんりやしれはうり　　六条院れつまなわ
まれこゝ人〳〵さへいとあゝとにきさりゆかきららめたとくて光りあはし
河古 浪乃音まれ宮きうしうこれ宮の内ハまのこゝ人〳〵やいはひあまりの
双調をまれつきとうの調みし四まのこゝ人〳〵としいふこし
春 双調　夏 黄鐘調　秋 平調　冬 盤渉調　壹越調中央也
箋 まれこゝ人ハ双調とする律なりや　　箋 私云 奥ノ義 張まつり
秘 まハ一段拍乃こゝ人〳〵もことなるを守人〳〵をいふよめつりれ
示をとし猶ふ人〳〵もこそおかりしあり乃んとと
くりあヘにふるまれ示　　河 反音ハ律也
河 序拍子 十二　破拍子 十四　或本双調拍子　喜春楽 黄鐘調 中曲 古楽
河 くりあへハ呂より律ようくへするとふるまれ示ハ黄鐘調示やあり
平調よてりうらして用るかや高く〳〵しふるまれ示も呂也くゐ
あまれ律ノ呂ふなりうや呂律混乱まれこゝ人〳〵ハ双調とする律なりや
箋 私云 奥ノ義 張まつり ふるまれ示ハ黄鐘調也
秘 くりかへしハ律なりうし ふるまれ示ハ黄鐘調律也 皇麞ハ平調律也
あさみさき知わう人〳〵し　　秘 律乃事也

河 青柳をかたいとによりておけや鶯のおけや鶯のぬふといふかさは
おけやむめの花かさや　青柳 拍子十二
催馬楽律　律　長生楽序　箋ニあり秘ニなし　安名尊ハ呂の哥也　青柳ハ
律ノ哥也さて呂ノ哥安名尊と律ノ青柳よりうつしてうたふて
おりかへし　おりかへしうたふうたひあはするはおもしろく
秘 以くりかへしうたふ心はいつれもおもしろく深し
中宮の御前にて拍子あり　秘 楽のおもしろきなり
実 春のはなと称さうおもしろしまうし
いつれも春の光をとこそ称しつる　河 舞人燕々如登春臺
弄 蔵春閣或花春陽なといへるなり
箋 春の温和の時の事を花春陽といふへし
秘 此六条院ハ温和なる所なれは春の上の御殿よりことも
むかしもまつぬさねとのはりぬる事に皆ひとしく
よろつかはりたるに此殿をおとしとは紫上の御かたを
人と侍くおよはれたるさまなりと　河 紫上の御かたのさま事し
飲はなにゝそへさるなりとあり

みしれるはいつのむかしこれ　秘 今ハむかしのつれなきかなとし
ひとともなき見れはさこそ　秘 此むかしハ今年まて見し諸分を
秘 さいつまてもかはらぬ事にいへり
おもしろくもあはれなるなとひとしき人あるへし
弄 むかしの春の宴の事なれは此ほとの見る中このましくあはれ
見とかりにしたる見るもれいよりうちそれこはくとりよ
こゝろもうちのくるさまにひかるされしなわとま
わか身さうつりかと　人数なるぬ人あり中くえいひよろし
深山のさまゆきし給人ときこえてすゝめるやかにもいとさむて
えしもうらいてぬ中におりひよ
河 さるれはかの中の思ふハきなきうら出る事のかくもあきられ
秘 此国つき他もいやしき人をいひしよりも思ひしらるゝ人かと
このふとこゝて内のおりひとの中将
弄 うしつ末の中将をおもひおもしひとなるぬなり
秘 実の兄弟なしつ捐としし中将をうしなひ末なり
もと兄弟ハうちわ　秘 さしめへかわりかも定めはあひそこれよし遊

式部卿の宮

としころおもひしりける人に　　秘 常康親王の事なり　　二条の太政大臣の御子なり

元慶のころより仁和の比太政大臣御子小野宮殿(?)仕[illegible]

五月(?)勝月(?)東宮侍　[illegible]

うけたまはりて今案のうた

式部卿の宮まつらんとおもひ

こふる心うけたまはりてとは理運なるを(?)あはれ

なきもいとはしからぬ[illegible]かれして　　不 免辞とみえたり

なかくひさしき事

　む 何にとてたえにけるはかりそめ(?)にしうらみけるや　　紫の宮也 なかくひさしきものや

かすかにうらみし　　何 早速

　矣 ときはなる(?)もの(?)とまつる心よりそかくしつる　　紫式部也 なかくひさしき乃義か

　秘 ひさしく見えし[illegible]とけし　　イ 本意也　　海浜時也　　義也

おもひもおなしきまつりのこし　　何 むかし男の[illegible]とて[illegible]の事を

うたがひの心といふそ人よ君(?)とのまへに式部卿の宮[illegible]の[illegible]あら

むかしくまのみなもとはしらくかしてけり事

秘 [illegible]まつる(?)の[illegible]のうちにあさましき事かならすしもうちすてて

しらぬ[illegible]よのつかへ　　式部卿(?)の細(?)おもひけれは事とされ[illegible]寄[illegible]

むらさきのひとものゆへにむさし野の草はみなからあはれとそみる

何 紫の一本とはゆかりとよむへしとうたの心はあれなんとす(?)

不 式部の宮の家より源氏の御女と名のあはれなるやうなをもとかみ(?)のいへ

御かた(?)よりあはれにゆかりの家とうけたまはりしよりにはかのたのみ

菊花と露乃例によそへたりと

新 例とし菊によそへたり

秘 菊と例はよりなりなかりしに後撰よりてかうたに此心を知りぬてこれ

いふならひ(?)と　此挿頭の心なりとし　　義 挿頭をもちゐる花ことに寄たし

秘 菊花もちゐさうしと

おなしうたとして

何 後 ちかくふかくかなれむすひしものよ[illegible]おなしうたは何といふてとあ

不 道人も[illegible]ものの山よりいりぬるおなしうたの事をもいはれん

今案 式部卿の宮の連枝によりしかるにはおなしうたとしと定めてし

義 おなしうたとは家の色にて菊のうへに事をさしたる色を源氏へ[illegible]とも見えたり

同しうくしとしてあそてまつるをゐふ

出 なまれのふそ色とさし給ふて　日　私云此詞河海にも出せ所也

今は相れたる表紙のなかにしく葉なし

私云義女式朱点以下如此写之

也源氏 あらたに身となけつ色しやしは表は花れあさきとこさきてんよ

秘 此色とこさきてみすとしいまさ源の御ましをぬ袖し

御読経のふらふ月となくは色さこんとなりて花れあさりとこさ

さらてけんするへ必もとそのかさられこしいあらんそと候あるて

あらたとう〳〵見え　誠切なり

え毎らあられゆりて　次 須

宰されて御あそひ　私云此段まて私おわりしを見えられける

日れ極ひれ事とこそ宰まうしいつとおお給し初れ羽さ日とし

日中宮の季御読経れらしめし今日ま其よりおほ蝶より

仏々も見なとこさせし御読経れ成之候花し給ふとこそ

なふら中宮れ御ところ毎りれらしあなたりなり

次 此節月令に二月三〻　国史云天平十七年九月平城中宮請僧

六百人令讀大般若經監膳れ　續日本紀第十七　季御読経とは春秋

内裏にて大般若経読ませ給うこと引茶とて僧に茶をたまふこと

中宮まて同し

異 六家抄まてかとこ在り例れ三月ハ延引あるへし六月まて

事し定まる例れ大般若と讀まする

箋 私勘年中行事秘抄云　季御讀經事　諸院御讀經事

四ヶ月二月或三月日時僧名定ホ四日

定日被行仍官を例文副天白興福寺皇義文名弁等之揃將文秋不進

才二有引茶才三日御論義秋無之

根元抄云季御讀經二月八月於禁中衣講之四ヶ日之義才

二日引茶とて僧に茶を賜ふ事は天平元年四月八日始る貞観

江次第云　季御讀經事　私勘此義未見如何

此外は毎季に行はるゝことにや

春秋二季請百僧於南殿讀大般若経其内定御前僧廿口於御殿讀仁王経納言参議各一人著南殿行事自余皆候殿上卿奉貞観御時毎季行之元慶天皇践祚之後二季修之

仰著陣仰弁令陰陽寮勘申日時發願日時結願日時又仰弁令進例文

硯史六人進之例文置上口前入年之僧名之僧名之帳諸寺解文外任并死去勧文木奥福寺延暦寺本堅義者経文

近年去年僧名上押紙勧置参讖前加入讀書今年可請定之僧名硯紙并續叙并板等

上卿披田定文令

叅議書之大弁書之若无者他叅議或有令弁官書之例
總而百人 僧綱 大威儀師百口中 威従名一人百僧外 三會已講
請寺
東大寺 興福寺各八人之中止四人軸請下四人擬次才一人 元興寺
大安寺已上各一人次才各一人往年 茱師寺 西大寺已上各一人次才一人八人如東大寺次才一人
法隆寺 東寺 西寺已上各一人次才一人 延暦寺
定心寺又次才一人諸寺次才各一人 梵釋寺 崇福寺 天王寺
常住寺 貞觀寺 喜祥寺 橿薬寺 元慶寺
法淋寺 仁和寺 円成寺 醍醐寺 廣隆寺
雲林院 法性寺 円融院 慈徳寺 積善寺
園城寺 法成寺 円宗寺 法勝寺 尊勝寺已上各一人但通僧綱自有出入
定畢副日時勘文入筥奏聞付殿上弁若蔵人史撤筥文反給下弁〻先造定文
上卿作宣旨給次給日時上卿作可依勘申史撤筥文上卿作外記可催諸司
堂童子由弁申請奏若殿上弁即付弁令奏者後日決書僧名奉所〻大臣
家立紙行事上卿左右大弁行事弁以上小葉子又与大夫史

季御讀經
當日上卿以下着陣右外記問諸司具否圖書堂童子南殿書居之次将不也召
弁問僧叅否次奉仰定申御前僧或定申〻無仰仰弁令進例文硯
等史二人進之如恒弁務記取見叅僧堪候御前廿口合入筥僧綱四人令叅議書之用大弁無者他君役
之僧綱不候例延喜十三年和四令蔵人若殿上弁奏入筥反給正弁尅限至上卿
御行事弁令撞鐘件鐘季御讀經時懸於門外〻令業永平門欤明右近衛開永安門
大臣於陣羌定可候南殿之納言叅議不南納言殿為〻行事地下者時納言可叅留
不可着南殿若為昇殿入者最未入可着欤季御讀経時下之人叅御前〻但臨時者非此限今案雑季御讀経西昇階自下但東如
次王卿叅上御前左右近次将着南殿簀子敷座前将者但先有
候南殿也将者出自本陣令着南殿候宣陽殿或在一殿西人時砌召并渡斬南廊南殿若無一令候府御次将西昇階自下
三例令上度不御前近候衛僧例一入八人自僧明之著喜十羨朋義上床七仙花制盗木門入従著督伐
侶叅上次威儀師前居在僧東西廟之從上座定羌定法用議各一人着南殿次僧
大諸講令威寺有奏儀次識由之遺才之僧在者東西令或有威從非入自而僧散伐花著日花僧候奉御仕前導上卿師例之七仕従師使引也從頭師導若余師南僧咸殿昇儀之依僧無自師可西別奉階御
堂童子着座近例書圖之不為然入而自在散西花著僧宣門陽旧殿例校圖書例書檀著上淨衣御導師着唄二師依之從之儀催已
置王笏卿分花僧左右各十人在西僧居南廂堂童子昇自用中央南階入開段打磬

行花宮西後座衆僧行道畢唄不起堂童子昇納花宮退次将御御願
趣経東階入自南廂先居上卿前仰之随其処分就導師在辺仰之〻令検先例延長八二月天慶三年三月季御讀経被
仰之就中延長貞信公被問御願趣於并夾明中将来仰之〻次啓白教化讀経作法等畢導
師復座従僧座具取呪願出自東著従僧等教座具従倭師一人居願南圖書官人各在行香机前
尢右行香圖書官人従倭師搏遂王卿著叙之人於本座解之置笏尢王卿若有不足少納言出居将於不
足大夫外記史近代堂童子右侍従猶不足申加殿上人又不足出居将加之光順三礼両者呪願之
後行東西才一行僧不行自余僧圖書官人取火蛇相随王卿
後座従儀師跪佛前着御導師等出自西方著之夕座初夜半夜晨明七日朝座等御導師也
僧等退下王卿退下出居下出居下王卿著陣饗近例不着
御讀經事
西宮臨時云御讀経上卿依仰於陣定僧名勘日時六口卅口随師伇内蔵
寮進物讀奏蔵人奏下弁史催爰引茶仰内蔵〻殿四位行水六位引茶
甘葛煎一以茶殿上黒等之類蔵故萇給扇御導師有随喜勺〻司卅口之時撤母屋御装束以
御物移仁壽殿御佛安御帳中御帳東西設聖僧座其東南少
少退敷僧綱座〻南座東西敷凡僧座北御障子下限御帳下皆敷
僧座東端威伇師候前居磬佛前間別敷御導師座或東廂奥僧座中御

導師候東庇南北敷堂童子座近代南座數出居座前殿上東户前也出居叅上王卿叅上法四也以
仰御願旨行香時東庇座僧綱西南座僧立義香兼定室童子
押小柱也西方柱也五位四人若有闕用四位可用六位之由在蔵
人式
天慶五三廿五仁壽殿有卅口御讀経公卿候渡北面出居南
殿北縁西一間延喜廿六十四於南殿三日御讀経蔵人行事
季御讀経广和四七〻民部卿藤令申云勘御讀経日時召陰
陽寮ーー〻〻广和二十二十三丁酉此日請廿口僧清涼殿讀仁
王経依大変也
十六日庚子大納言源〻佐忠奏巻数僧名
天慶九六十七臨時御讀経結願也僧数卅口之外又有威従
殺人作圖書令撃鐘〻〻威従巻数付吏〻付弁〻先覧右大臣
次奏境返給繼外記
小野記云御讀経時打鐘事二季上召行事弁作云臨時願若
蔵人仰諸司令打但雖臨時者如二季二季時兼明門外万壽懸鐘臨時掛射場
四六十東大寺塔上虽示帷之由寺家解文ーー〻〻

八月八日宣旨云同寺中浄行僧五十口始自今月十一日午
尅七ケ日間於大佛前轉讀仁王経令有冝感ミミ其供新口別
宛黒米一斗可運送之由下知大和國ミミ
又始從十一日於清涼殿七ケ日令廿口僧轉讀法花経ミミ
寛弘二九十九被定清涼殿臨時大般若御讀経吏依東大寺
怪也　長保三年正月九日未刻從大佛身水溢書如行ミミ東
大寺言上者令神祇官勘申云非怪所国者從卯酉方有言上
兵革吏欤陰陽寮申云怪所非大吏天下有兵賊之吏欤同月
十七日宣旨箇寺中有知堪能僧口始從今月廿日已二黙六
十日間於大佛前轉讀大般若経令有冝感ミミ但供新用本供
物ミミ　延長二月廿一日天皇召僧正讀如意輪觀音儀軌
广和元年九月三日差藏人所瀧口人内蔵宮人校書殿人等
修二百ケ寺誦経（鵄息也）造寺使賜所御牒於在地国ミ令供給也
天暦三ミ三記云御讀経結願左衛門督高明依驚同帯弓箭
先入解可弓箭行香ミミ　私已上箋被勘入処也

やうそよのうて給ひて座をとゞめとりてひのれよそひよ人のふへてあかりわ
河 桃御裳着し給ふ
小 信物あやまれり別によろしかるへし
奥 一説河海よりてあやまれり口傳あり
然るに此うつ岳の宮嬰ふさう人のふしとこ　從宮又説あるとこと
秘 東宮し給と花宴に被出るし臣家ハ宿家し東宮ハ岳の方そひと
然るのそひと宮のよそひりはつるとむらこと
わかさよまかり給ふ
おとゝの御いとをかしうけり　秘 中宮の御かたへなり
いつくし紀伊を御なめなり　秘 源の君ありし給ふなと
春宮の人の御あうしに紙よ花まり給ふ　秘 源よもうしとみ中宮と一段あるに花まり海とる
秘 むらさ花の人のことよりも借花とし給ふなり
とりてふよ待つ権さうけさうなとかうハ八人
秘 皃かあ舞人なりあい時のよに蝶なるなとうなしれかうわし
小 花の紙よ舞いつろとも花瓶すらさうかうハ乃かきう蝶の舞人
なりくされ　一説 まうけてかまう蝶の舞人とし皃ハ今の世かなるかきまし

鳥には白き〇のかめにさくらをさして蝶にはこき〇のかめに山吹
河 法会供蝶鳥供花定事也 迦陵頻胡蝶菩薩或云菩薩捧供花
二行相分経舞台上壇下捧於仏又定志二人取大食也
金銀瓶　天武天皇御宇自対馬始献白銀聖武天皇御宇
自陸奥国進黄金九百両　花のあれ多きものよそひ
てあ〇白き〇ふくろのへあかし此花は折り花よりもなほ下也
御前親王さうらふもてはやすましく人かすならす
いひかくしつつ　河 可畏 忠通
鳥のおまへの山さくらよりも　秘 此の心よくに春をまさせたまひて
くれのさくら　秘 折り花そてはなし宮の花也
わかしもいろはなよりもにほひされを　河 平池舟座の事也
秘 蝶鳥の舞をみくせんに舟座をみる人に給はれしをおもひて思ひやるへし
おまへよりさまさまの　む 西方の中門の廊を左右の舟座に作りたるを
かくれもとりなりけり
む 胡蝶とは日本紀よりくらし給ひ舟人の名と云は海河やまなり　河 幄等 擬幄縮也 幄布也
新 胡蝶なとにうつけるなかりし說

秘 わらは花瓶可也
かういへとも　蝶鳥の八人なり
きみかうれへて　或 宴出席にて天子に奉と行ひ給ふとも
ところの中ねむりにしをして　夕霧也
花ぞのこころをとさへや下さに秋まつむし　ハうとくれの
河 乙女巻よ出見れをる人中宮の家によりて春待つ人を
まうやかしのこしを筆海して宮にあらしぬるし
秘 秋好中宮の秋をさかゆく御身の上におとなはれ花
此蝶をとりもてはやしてわかきらわれとし
家のみうちの御方へ　・中宮 好也
このふたの女房達も　秘 此のみ屛にのわかおのか女房たち
不 中宮の女房達春の宮の女にて中宮のより御給ひのしうち
花よおれけて　不 情とありあかし
秘 情とれなりあかし給ふさうさしなり
鳥のうらてかれ身に鳥の思てられ中より
不 わかうて鳥のさしつる給ふ鳥のくにあつまり 花鳥余情同し

むかしも越調乃楽し鳥の楽に感して花なり鳴鶯も沈
め而鳥もうとおひかるとなるへし
河 鳥ハ迦陵頻しも越調序拍子八返拍子急拍子各八 古楽中曲
きこゆる所まて　鳥の楽も鶯のさへつりも一所なるへし
うらゝかといふなり
きうになりつる　秘 鳥乃急し
てふをまして　河 蝶宇多院御時被造之忠見奉勅 天暦二年
花の花瓶に山吹をさしたれハ蝶の童ハ山吹のかさしの人
舞つるとこそ一ハ蝶の舞に感して鶯乃蝶も山の口まて
へまひ入りもあんしうの鳥の楽に沈めの声ともれのさへつりしきに
鶯して見つる人ときなり
実 舞入るゝ鶯の蝶も難ぬりとに舞合あるへし鳥の楽に出
の色と合せしこと蝶ハ女の童の舞うらあるへし 日式義なり
秘 蝶ハ白ひの楽し花鳥の心に借されこと薄の鶯にも鳥もよる
さえの蝶の楽に鶯の蝶ゝ飛あしといふ 又あまたも用く
文の花けとるへし　秘 中文亮

ちらくよあふ　秘 蝶鳥のちるハし
かきたもらりへさらむ　桜山吹の花をえて用意すなる
を給ふ一ゆゑ　河 白細長の之にも桜のかさねかへし
それつ花あれハかえかさし絹と思しあるへし
孝 このあたり事なれ　一勅合点ことなり
あし所　ぬ 勝負 左舞の者の御かたへ大将の給し
細 左給と勝者といふを給はしてさきせぬ抱なれはし
秘 花鳥ふあり
中将君よりハあちらのかそへたらの様へと　細 女のさうそくへて
宮ゆうかねなりそれは中宮の御かそへあるとめさせてつけ給し
孝 女の装束とハ宮ゆうあかなしたるへし
御へつり　中宮の御返事し　実 あつうそれの梅し
その立ふ孫よな花めくくして八
河 ゆう窓の梅のかさへよ鶯の音になるめて身意もとるかな
秘 その不所を物この御ゆうらし事し引きかよあり
七部中宮 こてふまたもさせ寝しなのもしらあるて八ことも山の色をそてさうせハ

師 なけゝしおもひて八重にうれそうりもる涌てゝおほつる君にかはるそよ
宗 上乃句よ重ね侍らぬさにとおもしかゝりしお上せるつゝとち
いきにかと色々て出なを見よ世られしもさにかうりて中宮
乃御事にハさる山をとへしてさりせむしもいみ給へるなれ
奥 色々てつる心をうや人をもて色々てもいとし
抄 ひるて涌て給ひれるとハそうけしさ蝶よさそうれむ気乗なとし
とく秋の御うらしとも也 ・ 師 此らうとハ上藤乃事秋好中
宮紫上なとし乃事し此口先ハ前乃事し給ふとふ侍るれとそこハ
くる早下乃中乃又云彼猪菅と時の人とこふ侍るれとしひそうれ
宗 中宮も紫上とも寺にさ切乃へゝゆくへとかれと時としてハ之ふ
ゆうにもいくこれとし定め給ふ人乃朝がりへし
箋 上藤乃めらの前まハさしもなれとし
抄 紫上と又中宮なとにもてつる前内藤さうきへと涌り何れ乃
なれし云のとも一段しるうへきりし之へしてしかしもの心ハ不経
前とも云猪さ云のゆうにさる紀ちと前の紀よ侍し書し
細しや彼乃人めく女房
抄 時乃為に奉る中宮乃此前の女房達し

さゆうれしくもありけれハ
抄 同しく前の紫と
奥 むらさしといふこと葉まても猪給作らの給なり
め也それ也ハ乃
抄 紫乃へさ諸前也時よりおもらふハいひかう紀
師 紫上とむらさ也君と申まても色と匂よし人と申しようりさ之ハ
深きをあまりにへりて深き猪よもゆうしくまでまでく人
人深き海川面くともなれとはるかや
抄 前ら留
宗 是をおそ方君乃にくるら井とかゝらる朝しく深きハへりて浅
くをいひてもうりさことハいゝる心深きハ人よあさしゆうくさ海底
事ハなれし又深き前の紫しくへ此心深くきさことらうもすかかとに
らうくさふさそいふなり
奥 前くしよ猪しかれとも深き心の紫くハともうれとと
抄 深くもいひなとゆかんと云まてと猪御く前りし紀いとならう
ぞそてしさらに深く世段もいうしれ猪ゆれとも色猪細て
いふさもゆうれ人かうら井と紀やさむくしおりつハ人ものゆひや
うち何とも紀やとも心の奥ハうちかへりとかくむとも人へとと

家し紀ハしらすありつく
秘 身をうらむまてよく心つくしく見つゝくるといへることなり
いはれにも　須もそけなくもなのめなとし
かやうの人　秘 思ひつゝと思ふらん人へおもひ給ひし
おほろけにかゝりしさまへ人さにもあられ
御身にあらて人まとハさてあらし深のおもかれとなり
かやうなとハまいらせ　秘 心ろ猶いもえるうれとおもえとし
奥 家令のかくてしされハまいりし御親にもてなせ御覧まいらせしとし
らておもしにも
とのゝ中にもさてとうしろ家もらく　秘 内大臣
御つらへとも夕霧の宮の御元服のこと　秘 まつらの方より心深て
内の右府ひとのうへてらせ　秘 柏木なとし　是ハ宮の御
才なれと女君にもむ川もさうしけて
出来かり　奥 夕霧の御かたをひなとしけて
それうらの衰ハあらて下になりて人をとか無し婚君ハ見えかな
河 内大臣 夕霧君 實なり　両子息家しもしつらいもと夕霧君大宮の

さこそおほしてかくしこの元服なれハ見えてさしなからく思ひ給
河 夕霧君を内の人かたの君まてとかおもひと知りつゝられな
と家しさるまゝとてのうれ哀しはかりて下に人君しくみ給
ひそいふかてもかの間しつかにそく知らせましとなけのまつ
とのふなかれ　秘 先さるよまれ
奥 思ひつゝ元服の中納言なりかさなりて元服なれ下になりて
まことや親より　河 内大臣とかく給ふハ内にてハ御前ふかくなり
さみにもりし　秘 實なり親なり家も心地せぬさらしとも
されとも深へくとも見え中なりめし
むとうへよもらとけ　秘 深とかくへよきのともかくし
おなしとよなりたれとも折に思の　秘 夕霧とよ御かたとかなるかれとも
これハいとこかいつさな不　河 才 日本紀 才学 同上 庶
先ハむかへるれさ夜なかれ
衰の人乃いまあうしう　秘 御月よなかりし　同月天氣和又晴
さい乃御うさに　秘 爾露し思ひつゝし
おもひてしてれうしう　秘 思ひつゝれかへん帝しよらへと

されしてさて源のおもわれなから
うへかし
くるしひとにおもほしあり　おもつれんて
いつきも侮しきるひにて　人いつまてしいつくしうて
しかもらは尚ゐる月ちかとあり　抄 世継の文は源の御才能と
いひおしらは中にそても一段と侮ゆへもひおの人ともはふの
ることそ世にはやく源よ心侮く給ひてとかやうれ人は出来らく物ん
れ文をみるしそおつけまてと源の宮ちて
箋 世継の文と源と見ゆるかりるに侮てもふ事あれしとし
そうしさゆへあらん　抄 世継の文とゆしおもそては給ふか
も人あきこれ心あらん女もは文ふしそんともさもへこそや
作りましくれとおもはしあり　おもつれんて
右大将乃いとまうやうふ　抄 盗跖して知らぬかへし
忠れ山よりれ母うまと　孔子往何處乎不寄之
論語云長沮桀溺文　又石門荷蕢僕封人楚狂接輿孔子をと
あさるりし事おとといふて或又孔子東莉山れ下に住くこ

人乃小児云君子聖人は上天命と知りて下人情を見わく凡ちまた今
車まちたに孫をまうへし後何車と去らんと孔子車とそうしあて地よ
わりき所おと孔子作とは云ふや盗跖は云大ね云ふりあり人まも忠の
ふらふ来つふと孔子れ作よ似うると云ふれ孔子忠乃山よまつふに
あつさうし盗跖と孔子との事おもしなうへし未詳
実 同孔子れ事おろそかし　一説大略孔子れ云文れ程なかの御得
秘 花ノ後よ一向実法おる大将をも忠のらふ小おき世の狩よ孔子かて
れ人とともいつしとや俗よ説れまいりまつさおし云ゆをし後と不用
川云ここいりらり忠の山後乃云けまは入りの人まとふらん
今案孔子れ母なる事とし事は昔より世乃人とふさにいひ悲さ
ア孔子かの聖人今れもも時にして母ら御と事れ老しく盗跖
足大将れさはあらく実法成人今れもも忠の山よ入くは云ふものとふ
といつとしられ母まと見のかふ文帰のふおもしさうへし後ち
れ後皆あやまれり此源乃後はお違なれやや
中にからみれ給の
おもとさみたとまとみたらくは物事作と

これをいふなれハくもゐそわかれける　柏木のみてあかりて
一字　兄弟なりける事を源氏ハさうしてあけて此段をあらき源氏経て
をんなもとめしかとも見へけれともよくあるしみえて
義理あらハなり
師　柏木右衛門督　于時中将　乃弟　伊予守思ひ備中将にして
うちの宮の御ちかしくいはれたまへる　右京風流なるへし
或御説ありけるハ左さしあひしうらさ伺ふへし
私云勝月夜ある手綱の事を錦のさかりけれくさをそ花ひとつにも
うらくしう柏もやみし給へる
秘　あひつれの義へありぬへし柏木の又あれハ義へあくさ侍へし
右をあらしいたくりかくにあつらへつまし　秘　女のあらしくなれ
あひつれの柏を立ちぬ所は右をとめして源の中ある
ちん分の別事をへつくろし　さらりて彼女をしれハあらそ
て御宗よる事の出来ぬるのありて見れハ思ふく待ちとまつは
男のくらくさあり　中川ぬよ女の有恵もへまつやうさと
家のゆくあのゆかし　秘　源の親なとし

あれなるけなるいつれかしらりてそのあり　秘云時右近の馬場
此段源乃家の事にありけるか極を宣ふて御まのしるかなの外ハそ而あふ
ありて侍あらくしうかしとあらかれ立ちてありをふきにたえてみそくし
もしハあさ海しもつへき程もくらやまうあり
見ハ教あらね女たちのしあるりをきえ候まりある事あらし思ひつけるし
或尊意にさいかあるあへの妹かにてかけける人とあけくもしく見へ
うらわてあらくらそ所あらし乃見てつにつけあり
此一段ハ男のさまよ私むてふりよ侍てまにかへしもなしとあらさ女のせ
ぬ物ともあひてそひちうにも男中へもあちらもひともう事を
いふ又そのまゝうらも言きさそう女のあるある人こそうかなしかしなれ
さりさにいへ人をいりかくしてかなハさうしてもあるらむ小れハ情ぬりさうといふこと
秘　自見の為とけとむし事を女ねハそれかりしらむつうそていひや
まめ事も出来ぬる柏しそれもといへとも心事とさせていへむし
私見あるの義兄への縁
何ゝ月をらうけにも　師　思ひぬめしあのゆくなりあれ給へし

ものくるほしうらみけれはとありてこの　有常か事にいふ
事とはとく此事とは前をしらぬさなり
らうとくんはうらみもせ　此事らくしらすなんて
私云此男のこゝろひとつのなやみ給ふにはひそかにと人にしく
うちひそかひあらはかくしてなくしてそれ給はあまたあり
此はく事をなにしられと女の顔にあつはなひのみすてて
さてまけし心をあつてそのまつ男のいひかけたる人なと女の
あるところかへる事にされたるとうつ事にいひてさて事せん
彼の紀らうあへし人々まてはひえてさうらまうしと批判ある紀
また女の物つゝみ事あれ　此よりおもかし女のへうらぬと云て
それ此するあらかひくるを
秘　紀ことはとさのしやみ毎さかしくてそれはきけされ思はなるや
有常　秘　歌は友と幹と云し二人なり
あさること　秘　紀人ははかりし　弁
ゆふまくれ物をおもへはかなしくもわれよにあひなん

此二人はあまり情ふかくてなかよき事ゆへ事なかれと
人のかたにはよまれたる御返しよめるにもあらすとはいひて
此歌おなしく心もちなしにてはおもひのあはし
らうとものいはく
紀人は吉野まつりて（君によりおもひならひぬといふ歌に）恋の物語にも
君ならひそむきて　もひてし
なそへしこれをそてある　なそへしとは西ていまつる
このはの花の名　弁　卯花なり人をしるし名も柳も同
四月なれは卯花をかねといふや
さいひしとねなりひかりしを　先古をいふ事同
秘　わかものはしめ源氏の物語西条の事とみえ侍りしと根の
奥花とは同し今の人の物語しときこえ
私の事をとともひりしるなり家なとその物に
いまひかりなりしといひて義なり
またはりにおほえて　もひてしるへし
おさなきのこひしとて出といふものの物語のもと思ひの

一こゝハわろくあくえんし給ふしなり
身をうかゝもんけくすてつけ　宮ハひ用意あるとあるへし
いかくぬ事なく　詞ハかくけなくしてある人のあるの雑々
但和哥はなしひかくれてとる詞おほし
花　あるぬ事なくハ不足なりけれはなるまし　河海ノ説おほゆへし
ことく人りみんなさん也　抄　まよそ物よみんなさんは也かし
あやとはのえんまいにうちかくわかれしまいれあ
弄　あらつき君ハ廿之源氏十七歳ノ御時よりおかしの尻の若
君ときハ心よくハおかへしくハ源氏君の姉とりけのへりとるひさるへし
抄　源とまつことハ年は十二らひとし君ときハまた源の物ふかし
身くされて御従とハらし似身なきしたとるとこふへらし
さらに人きん御をとりそこし　弄　是ハたとゝ源氏の少将詞
たとゝ少将詞し源の知り給ふよりかれみえくとりもいれぬとし
御父くりハいとりいま　あるさうかれ文といとりいふへし
にくりハさらに世給ふなか　抄　源のそらかれうして末葉
らわしよりかある御くりわか事もなりとし

それとゝこれにらうしひたこれ　あらつれんよ源の也事と
わらかれうしい給ふもとさへらうしくおりひ給ふかとし
さて此かりやうふむしとか給ひとうか　弄　源氏ノ詞しさるの根本也ね
此父の事意まて又源氏をはしらるを知かるへなり
抄　花鳥ふあわ
いとゆるうらいふり　此よふ風流かけうさあらようしなり
くれまさり給ひとらくあく　弄　是よりかたのゝ少将詞し書乃
つらひかさり給ひとうしていみさ給ふとなり
抄　まらひくぬりしあかと御咲らさり給ひとらり既そいはて給ふと
内此わかいとの中将なと　河海ニハ中将の君とかれとうとされ
但こ此みとりかといはれるとも例乃男しあるとしとあり
此さうふるぬらうことゝもとしりわ　河　男子或ひれんしとこそ
弄　あらつれかりつうふ小女房此為し　抄　花鳥よあわ
等　抄　花鳥よ一同　但朱よりなる
いとらうしうきてしうる　源ノ詞し
抄　く世事しかくしとらり人わ中のうにハうまをうり　此るよし

なとしいふとて　秘 人臣様姓をいふて
源氏にしは末なりとはゆるさし猶皮なりしともあなかちにまりてハ人て
なるなりともうしは末なりとのおなしかハなりいふ人多かるとと
さる中にもいとなつまわたらんて
相人ハ様様源氏家ならに様よ人の宮の御なるとて源氏のなり給て
おのつからたすけあるへき　秘 宮行し
兄弟なとも世のめつし右合をも時もよて行事とハ後御事の合へとらんし
矢 おほ弟の御ことといふと知りへとことまかいひまりてハさんとの給へり
秘 宮の兄弟なれハなり
きこえんまてハけしそ　む わつらひさるへし
箋云朱雀なり
かうなふやうやく　秘 源のおこつゝり立つ相なり
おほかたもおんしと御心をへと
なきと行とうかれをつらんとれへいふつめかたにへやまうきこと
ま おりつれんつり給ひつなけくかつさわらんとと
河 御心をへとハへ後をうし　秘日

かれおしらに立つるま　まうつるゝ又内大臣の事とし
わらくしらうるとなれかるふ　まうつるゝとも源の宮つくしつき
世まんうちもたひとももろくたうり給いつゝなれ給ひるあるお
乃行きり人へいつまてしらひ給ひ人事いつくとし
こて給とし人あへ家　父おしつくハ継母の御中なれた
れ世の人まんたゆへるうたに　矢 下給人の宮の子なりし給ひし
ふ おろつ此宮の年ととらて後宮の歎まへ知りせんと源氏の立後
矢 非それあまり御人ゝき人の宮よおりてき後は宮かを父よ知りせさせ
家のおほとりもの給ひかなれしハ
秘 さてされ人あうしなかりしと御事のこと家のひしなりわ
私これなわおほ弟君よ志らけのふへやれまさ宮と源氏
いひくうりせとあり給ふなりわ
めしうとうにつ宮なかつたなりしちかう人　河 右人之人なとこ右し
ふ 大和相給このさいし　左中将女君の此いわうとの御衆のとさて宮を
うりかうか御のちのよういれめしうとあれくましかう人へとこれりん
れとうしとのさいし君のひてよもよなんありける

梧桐日記小野宮殿のかしらとりの此物語若菜の巻にてみえたり
抄 古人ハかけものし
字 かしらをしとハよの井なとにかしらのなくし
さかりなんとはなく事なくて　　弘 うハなかりしからかれかれん
かれ侍るかひたつ人なかうしにかりてまちてもえあへし
さハなくて待て侍しさくらせあらん人ななかてえらへと源ハ今
かうもなへき事しなうつかれんなとれまう源氏もしくくなかへて
秘 手かき給なとのあともなかうらにありひくなへてとひあって
なき御心なりけるも給へとなり
それ御心つひなへき　　此あまりとこひ人の名のかとなりうに
さてかしら中庵とてよらひらまんハふなへ急きもかりへきこえうと
大将なとしへあかの人ないひとう給ひなてうといとひてうに
弘 若菜の上大将の中方ハ此上の御君桂木相模君の母し大将その人
よそれてとひくとうへとひかきうはとし
矢 あつれ事と源氏の心よりひ宮へのかへて大将の中ハ後人
なくき方行りしとひかりしかりなれるとし

円 大将の中庵とてさみてとうてふさひをまうとてもまうかうりとし
まうつ御胡ゑていつくんとなへし　　かいの上合点
字 此若菜の中方ハもと此上の別後の御此
秘 此中方ハもとかうつきき給ひよそれとひとひとうに此おも若菜
とかとめ給ふとし此中方とてハ此上の御かうりふ源の御
身まてハらとなつまてひかって
さうおへい事なれし　こんもと中庵とあさきかうハこふ
くこ事なれハくまう給り此上の兄弟の御もまう
かう御のうハおやかうにも　抄 かうの中事ハ父なと
あさえいをかへかへし大れともさされよ侍らてもうへやかれ
やもとひ夕つとをいくひなそうへとく心得てもかへと
御心にて給ハさうん　秘 いとか分給ハさうんとし
まてとし庵りなきへと母君と云かいかう人
母りハ文もあかしハ心身をうちもなへかかれハ源氏の
されと夕のとしてあかりて心やくし給へとし
御心よかうの人事なと　まうつの人を源氏まかれかへかさん

よしなしごとしかくいへども此前の詞にはうけぬ事なりといふなり
あながちなることなりけりとてかくのたまふなり
まめやかに　源乃詞としてかくのべ給ふ也
ひがしらて　むかしの詞にてかくいふ也
何事もおもひなりぬるかなと物語の事をさだめかねたまふ
花　そらごとゝいひはてむも事の心たがひてなんといへり　又花
本意とのことを記したる物かたりなるを又そらごとゝいふ也　秘
此の中の心を物がたりのおもひなりたまへる也
河　おもひなりぬる事にてさて仏法なるさとりの経にまよひいづるにてなん
筆にもおもひなりぬる
さらば世の中の人乃後の世の事をおもひて　源の心なり
よし　よしなき事にもあまたの経にも後の世の事をきかせ　河　後の世の事を説とせ
秘　後の世の事　世俗よりいふなり
私　世の中をひとへに世俗乃流布といふべし
おほかたのそらごとの中にも　ひとしなみなるまことにしもあらね
これはそらごとにもあらず　　さすがに

うちかへしてはまことにあらずとていかにしたまふと
思ひしかるべき事にてはあらずしてまことのくいことはなきと
かやうに世の中の詞しも世界のあんうちに人にはいはれて
まことにいはれたるものなりと　秘　うちあへてこそおもふと
佛のみよき事にはあまたの事をとりわけにかきとどめ給ひたる経ども
まことにもあらぬ事ども竹取の物語のやうなるもおもひなりてさ
弄　まことに思ひなるものもありおもひのほかにいはれたる
事のまことに事しさてまこと詞にもいへることわりにこそはあれと
きこえたり　　秘　花鳥にあり
実　おのが世にはさらに人のおもひて源氏に世をさうしてまたは浮
たりしにもかたらひつゝいひ　おのが世にもおもひの事をいひしらる
ゆうしてもよしみにもれて源の心なり
いへり　　実　そらし詞なるなり
秘　むかしの詞にあるなり
也むかし
今さらに人のいふ事にはまことなくて行のまことにとみちびき給はん

河 細流集 いつくにもはつねのゆくへから竹の生そめりけるまさへそらみ
む おもひわかんとハ實父の歌といひつし
哭 むかしの方よりハ實父おやの事ふとりなりてよめるなし
玉鬘ハ源氏實父よりおもしろく實父の物語しかく露まうきをし
私源の方ハいつかよろしきかとおもひつゝハ實
父のうへゆかハしそ生先見む世の源と實父と私のよしに光
なせり前の詞よくうたハ世の事をひる後の歌とそれとおなし源
の實ひつまいふかく源と實父とを云べし
中くにしそ侍らむ　河 まことの歌なり今さらなれはなん
是ハ中くなかなか申やうやいらんと云ふ事なこれ何ともいひ
給ふれをおもふうしめて云ふ事をまつ心し是ハ源氏君を次かし
おもふやといひかへりをしんとそかくハ云ひて下の詞よいと哀と
おもしろうとい源氏の御心にていふことにつけても哀なるへき海
さ給ひにんなとかくにさうしもおもはれけり
ふ 玉鬘の中にもいかて實の歌よ思つく云ひの事にしいかなる
源の門のおとくにや縁り給らんとおもひとも(?)給
秘 説言こあり
ひおとこれんかへ　源氏の建物も(?)かつ玉鬘とおもひかへし給ひてし
おやと宮の所(?)とも　實父といふとも内大臣ハなきまゝ事ありわ又
なれハ光り給ふハあらしやとおもわれなり
ずうし物語にも　哀 作者物語なと方の歌よりく所の事を秘かり
人と知り給ふらんとかくさうしたる光を　おもふれ歌より知り給ふま
とおもひてきらうそれてかくいわし源氏のまつはせ事なんと云へし
とめさしてとらうおもしろ　秘 源氏なり
うへおもしろう　秘 常夏なり　むかしの人と海と
特にもありして源の思となふうり給ひて
なつかしの人のをさなき海なる　玉鬘の給ひと思ひ給ふ源の詞と
いかにへ乃を　秘 夕顔なり
るらけ物なくかを　夕かれの人をあはれおもひうられ
おほかれ(?)そらしあなれなるらしなかへし
これ思ひを　むかへし
うまれの人と海　あやしめなとあり給ひし
家かし給ふなるうれ　實にしかれもなとしかるき海し

かなはぬ
ありしもおもひまし見れんと　秘 源のおもふことかなはぬなり
さまし見えとある御心　秘 紫上の心は源のこゝろ
北山の見し月夜くらきのしるし御心にかゝることのしるしもうらうらとけしき
花は紫上の親しきか君源氏と藤の紋りて見たな見と御
御心にかゝるかくらぬとのかくれなることし
花は源氏君の御事をまし御心まし見れんと知りて見なりと
秘 花色にあり
紫の親王もつれ君の御心つくおもはれたるしひとゝ源氏
これもうらうら行とけなりひすらは源の御事か出来んとと
秘 うらうらしもうらうらとけと紫上のあつかくに源氏まかせて
なとたのもしきあはれなるやうに　源氏のやしく昔見ゆかにそる
よそへてあれとやのしんよなしとかあめのそうしけなりうへまよそ
源の親とあはあれのし宮なくれのかぬかなと
いかゝやうれりそもみえのひゝかそう
秘 花色にあり

む 又紫上の親し源氏君のゆかしなとされむまこの御事にみえされ
まことにわりなりしとある出しかくしとれのあつ
あれ心とくかくりして　心と見えものことを見し利根なる心
む 紫上とも心と見えやとあるかれなる
いとらしあはれもあるし　秘 おもふことはやれかたの心あるへきこそ
奥 紫上の御心しりて御心へしとし
秘 御親の心えつ御ことも此方なれとも源の御文の心をしてまたあつく
それたつしとやれとか見ゆへりしてやうりしうちあや
さ御よそのやとしふん文あり
哉とのうれかの歌かきうらとまそしとん知り御心へけまてし御文
わくとうけものまし見えしなりわ
こつゝりしかれとも　紫上の御やうに心から御心へと此りにくく見えとし
御心からにうへかくさうかわ　源の心中しなれは紫上なとの
相まとさしうつくしとふすみて
ゆうかくれをあはれにおもふうしをそうり御心へて
御し源のおもふれかなり　おもふつれかたへ

うちかへてうしつ字　緑槐陰合沙堤平れんし
字楓柏木なし面白き時節なれは是源の意におほせらる方ともみゆ
和して又諷し
河 此月天気和且清　緑槐陰合沙堤平　白氏文集十九
まいこの昭君　秘 あさみとりし
花ニまつ名ハ乃君れハはひやうに　注ニ不当以昭君ニ義ニ未詳
まかしひなとして　・あさみとりは諷し
なをやりすれ字らひ
ふとひうしおかしいそら御心を
思ひかけてハ似ふかたはよく柏木の心れ思ひかけたるなり
見そめてまゐりしハ　河 阿娜　又柔
あさみと柳く思ふ時れさのこ似たりともおもハさりしとし　秘 夕かおのよに似たり
中納言に思ふし諷乃　源の詞し
あさ緑君を夕霧のよに似たりとしも　河 夕霧の中納言ハ葵上よ似たり
秘 夕霧ハ葵上ハ一向似のかね猶よ人といふ猶ね母より八似ぬ物
かと思ハれハ今まつうハよく夕霧よ似のひつつあるかな

源氏 梅のはなさとまさをりて　そに見えてあそふへし
あらかれのかりし袖にうつる香ハ兵部卿とおほかるなかは
あさかれの夕霧よ似つらひたうと梅と袖の香よう(こ)そふ
ほのかしきそりしの源の身の程かにそうつくようしみへし
守 夕霧の若君はさかりし此あさ夕霧とまなりあれハうつれなかる身
ちなふられぬなり　或奥花ニ此月待花梅のしかし此由なる
昔の人の袖の香にそかへ可能れと私とあり
奥花花本に此義なし
おとくもれへりしそて　先より源氏の詞夕霧とれ事
とかれまいりて志のひし事なり
うそこを申さて　そのまてなるかたとりつるあれハなかわ
女かみちもなしひ猶ハさりつつそ
あれてもとまてちやうすつ事もえてしめとし
おほとのすれさ御
袖の香をよそふるからに梅の花まへ身さへかれく旅もまそれ
梅さへ花さへその葉さへ枝よ露おけまして花か字

又月ごろの梅乃花をとりきて世のつれ人の袖のまへそなへ
和泉式部日記に源宰相の君とこれらく帥の君に梅を
折りていれたりしにひとく折りたれは
かゝるにより花よりも香こそあはれなれや何しさとやさなや
む 右大将の君の家にてかはりけるにまかりつきてかんしれの
源氏の君の中の事にて御宰相の君と給へるあらさきすこし給ひ
秘 家をいた夕顔とてはじめ給ふなるに家もしぬれよすかへことはり
中くなる所をとひそふ　源の中将し
きみにてらしおりふしやとしろ世のひとかた
思ひとなくてかしき給ふすかく
ともかくも宰相もとろかれと　むらつれんとくかたな
なく宰相の花をおりすら源の君もうつぬ給ふよそへすへし給ふて
なかめつゝ　秘 源の祖し
いとよくめでくして入りとゝせんらくくてあはれ
宰相 宰相くへ此見てとりかぬ給ふんそとりて思ひくれともは給へと
いひたる世のふかたわ

あさかほはおりひやゝしさせぬんやうにゆるしたはすさそへかれは
源氏君の此程とても朝顔は折りひもしぬよ枕ねかひ
給ふなるは又一しやんさし此そへへことなり
此おとつまし中のゝ人てあい　秘 宰相中将なと
宰 宰相中将なかしに源とおとしめ人ことしうみ給ひて
いやうかつ此んかの人の世よありくとうかへき
第 あひつゝれ君乃心ありれ事とさゝて
秘 源のうつゝとれすふかわ
宰相給へかくしたて
奥 源の心うつれ源さ給ふはれしとし
源氏のまよひつゝとかひりしうへ人をさえぬ枕とし源の自称し
秘奥秘ノ者義し給ふへしとうかはあれいとやう源さこゝろさと
いふと花るにまかつれは源さま事とさへしこはあやまれ
又源のうつゝさふ事しての所も源のくいとひのつは
宰相中将すしまおりしおとしくかゝりや宰相中将なとも源の
心さし此想なる所給ふはあしくとこふ所あそつとゝいつまつ
ともそもゆかさんとうし給ふやうしとこふし源のへ給ふて歎かれ

なかなか女のまうしまうすとも御とふらひ御いやみとも見えぬまゝに
傳してうきよりさうしらふうしこゝろてありやうなれはみえ
んあらたまり見ゆ六条のきさきかうしほまし給ふみさうしはくいらうやうかれ
まにひろさうしらんをもこゝろとあるかよけれ人あかれあり
ありなりて風乃竹ふなるかなて
[秘] 風生竹夜窓間臥　月照松時臺上行　[秘] 和且清末句也
人をいこ女やうなるかなり給ふ。まうつる人のきさきをかへ
なかりしいかにかの御そとよれ家のひ　[玉] 源氏君乃女君の見給
ひつる御さまをとかくけしからうして女君よりもうつゝなる　[秘]
[秘] 初着単衣支体軽　此句も文集同詩の中の句也
[箋] 文集十九　七言十二句　賜駕部呉郎中七兄時早夏朝帰閑斎独
處偶題此竹
四月天気和且清　緑槐陰合沙堤平　獨騎善馬御鐙穏
初着単衣与体軽　退朝下直少徒侶　帰舎閑門無送迎
風生竹夜窓間臥　月照松時臺上行　春酒吟嘗三数盞
暁琴門弄十餘声　幽懐静境何人別　唯有南宮老駕兄

いと心うく　　　花まうつる君のみこ
[秘] 花ちるよきより
女こゝれおやけれ御あかりなる女しかはおほうふき見人はあらはしとも
[奥] 上の詞よ女ことの親なるをもとし源氏をきこうしく思ひおほし
人よしかうかりてうちそと思ひかて
[秘] 花ちるよかうま女乃御事は親なりにもさえやうにあら思ひと女とも
うちれと思ひて源をときこうくとのひのかしとるとて文なをいて人はるまい
つきうしくときひのかて陽々まさかれと陽なさ木ゆとしとなくさうなし
私は義花乃詞をとり女ゝうり見ゆ義と同事とこゝろ
[玉] 文又月大臣はおほき志のふ事はきことかくしか夜乃
物思ひもあかしとまうつれんうくおきひかて
[秘] 源の詞
うちおほそこそ
こゝろあれ人女うり世れとりりまて　[玉] 女れなりひ心さうは
こゝろ婦人女をかひくなかりしひなかの纔は年月世つましく
かし志と給ひ給うれと源氏君れ根と語し　[秘] 花ちるこゝまり
なりゆめうし女しいうしへ哉　[玉] 源氏の詞し

しのふかよはまつかくと　　なまうこれんよ思ひはまつくしられ
又夕皃之乃世うし乃事の是ふよはゆまうくしられ女郎
あくむつしれんもつして　　ちやうすさ曲れつく夕皃之よ所させ
ゆくりうにあゝ何かえ　　（以）不忘日中記　辛未日
ふひ風りす乃風うなりかんかわ
（英公公行上三本まで付紙）たれひうれこ給ひく　　源の出てふとそれ朝し
よそれ人ちかうおまさくへうは
かりすし我こゝひ志うね　　（少後）限りある名よおもひし源さし
（以古）そこぬなる乃倒やいさゝし山伊れ清ら風ふしそはさ波ハさそ
（後）うきりかさ名ふあふうら乃死あれハそこあらむもしぬ名れ源さう
むまうけさまえてあつねくさつこれそこのも知れいかんうる
そこも志つぬしぬハやもちわ字し出紫男よ人のうちハおく
まてうかも行そこ井さもの如し
もうし恋しこさく之わ　　夕皃之乃すと志まぬとし
られぬもあつぬさ海して　　おくつれ御し

いはさいうりこそまつるれ御んうへと　　又源の給ふ朝し
ゆうすまし乃なくてとて出のひぬ　　（以）蒙しゆうくし
（以）ゆうくへよおやし海まのふまし乃ん世のひとのや
（秘）花ることわり
世中とふり給ふぬ中にもそうしうらまかれきう人忠ちさ海と
（兵）太々これ世人のなつひともむかくいまこ知り給ふねこ
（秘）太くこれ世のなつひ男かとよまれ給ひぬへこ事ハもそも知かう給と
私ありつうゝとよかわ世んすまへしそのうへよれつうの男女
かなひとと人のうへりてまん知り給ひぬとそし
られうりまつうれさ海かもおかうなれ　　さるうまの出よす
（以）なりろ車とても知り給ひれさ給ひうらうけさうまとし出ぬ事ハしかさ
（む）私見ハ出まつぬ人られまてさうてしみえうわ　　出給ひて給ひまつなきぬとおとなれさうてさ給ひて
れんなやまつさまに
とのこまつこされ　　源の出なるふ事と皆し女房をされハや
去部ハのとも　　ありつれなのとこなわ
私京りはそてさうしいへ又かわ

身そうつりきて　秋心うさこしいとおかしうすさみ書なして
又乃あし女御のことくみえり　源より文なよりて
白き紙也　源より此文をこまかに書なし筆をさしかくしたるにて
白き扇のにほひつるとうつ人をもそれとしるにといへり
あくかれつへし　抄 光ありし夕の顔も
源 うちとけて源もうちあはせとなる事もかゝるにむかはせん
河 伊勢物語 うちはらし源うけ心うめきうらの文もむかしにむかひてかへる
源もうちあはせと御事の限とも秋の月ありこそ人との心もとかへりてなる
源もやすらかにとなりに人のかたのみとりうちより左中将の妹よ
まめやかにとしつ了一句に心をかけてしとをもて此をおりゆかりて候
抄 定家もなかれとの心にて
おきわくしてもかし侍られ　あやしめりける顔とにはらるれとなし
それうけ侍りぬ　抄 光ありしかほの顔とや書ても宇上下宇
中 人あるなる事せんと一筆は出事し侍りて
かやうのむすめにそ　源のおもれんなき
うら侍るれたる侍ふ　中 ちとかなしちかうる所のゆひかうる所よ

みしらぬ所なる心ちしうもそとし
うちそとは御けしき　なるよし源のおもしろき事よ付侍てをといへり
文よむものひとく源をかしかるこれらの心よりむかせかなしまかく
河 花 思ひより文大日の事のかきりこそ文よりおもやかやうんとしいらなし
大日の事乃名は六相よりも又朝露集にしるしたる事とも後の心に
文よりや出まうしとかく候しつたはりとある侍ることやかやう心に出侍人
又は大日の事のしとおもうせなやうやうなとにといへり白にそうなるお
抄 花の名に候をおもし候ししとし
いとふ所をもれんらして　もりつゝむ心もつしてしそとし
おかしれんとまりて人をもそれなしてもなきはれしむ事に親之病よ
抄 定家の文とも人をおもふとなくわ
かやの事し花乃　抄 幽斎の心ともなく人とさくなかなさし板侍其て源氏も定家も文といふなりそてそ
ちおとなしのさつもみえけり　源のさうろうふんかけ侍りけれと
源しろしてならうしかつぬ事をもれ源氏の名まめかしうしくも紫
されは又人々なる源よりひさきあんいえ定家文同人原れいよのそれからしく心かきさん

とこなつくふんくらしうちて宰相ハまうてきたる給て源と
宰相のしん思ふ事ハよろこひの事なれはこそ右大臣なりけれしかし
よろこひなりけるか
宰大将なりしは　又なにとて入道せて海辺にすみ給へ　秘 むかしの御心ふるまいなりけり事なりと
源のそれうし給ふ所なり
此思ひけるか中将をまたれれ給ふし
うらやましうかなしきなと源の給ひまいらせしと此中将かむかしの御かたの
海しれをもちとい　宰相の事へと思ふ　秘 赤彼の事をとりて
人の知る世の人倫の心をさえかぬれともあるいはそれは人のことにあるまゝの
まことよりに　秘 一方ならぬ　私此祖なし

若紫ノ此
所にも合本
付紙アリ

蓑云帰郷よしみて宰相の別れて弁を不可以に入来て
中将れ君の御ところハ　此ノ文とのしたへとも思ひはなれしも
兆うなりと云給ひけり
哭 うし給ひてかくれしてそ　源の人さへ深くも思ひてをもしと
同 このハなさ海しうる人さ　されともか人思ひてのかたるひ
わしんとしなをやうくしりしくめかなのしなかれ